

氏名	いし い み ほ 石 井 美 保
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学位記番号	人博第170号
学位授与の日付	平成14年9月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科文化・地域環境学専攻
学位論文題目	精霊たちのフロンティア ——ガーナ南部のココア開拓移民地域における宗教実践の変容——

論文調査委員	(主査)	教授 菅原和孝	教授 山田孝子	助教授 田中雅一
		教授 松田素二(文学研究科)	教授 竹沢尚一郎(国立民族学博物館)	

論 文 内 容 の 要 旨

本申請論文は、ガーナ南部のココア開拓地域を対象として、動態的な社会状況における宗教実践の歴史の変容と社会経済変化との関係を考察している。本論の主題は大きく二つに分かれる。ひとつは、開拓移民社会の社会経済活動と宗教実践の変化との関係、もうひとつは移民社会における複数の宗教実践間との関係とその歴史の変容である。本論文は、以上の各主題に対応した二部構成をとる。

理論的な視点は冒頭の序論第一章で述べられている。最近のアフリカの宗教人類学的研究にはいくつかの共通点が見られる。ひとつは、歴史的な視点の導入である。かつては歴史のない社会とみなされたアフリカでは共時的な研究がもっぱら盛んであったが、そのような非歴史的態度は1980年代以後大きく変化した。しかし、その前提となっている歴史観は、大きな変化は西欧列強による植民地支配からはじまり、それ以前は伝統的な共同体社会が存在していた、というものである。これによって、宗教運動は典型的なコロニアルかつポストコロニアルな体制への抵抗運動と位置づけられる。本論文はこのような歴史観とアフリカ観にたいする異議申し立てである。そこで本論がとった方法は、歴史的研究の幅を植民地支配以前にまでさかのぼることで広げたことである。それによって、宗教運動や宗教変化を植民地的状況に還元することなく、より事実に近い形の歴史人類学的研究を呈示することが可能となる。そして、その具体的な事例が、妖術から邪術へ(第一部)、また神霊祭祀から精霊祭祀へ(第二部)という流れである。

本論文第一部の起点となる問題提起はつぎの通りである。すなわち、ガーナ南部の諸社会においてもっとも畏怖されうる宗教・呪術実践としての、妖術の衰退と邪術の台頭とはいかにして生じたのか。この問いを発端として第一部では、開拓移民によるココア生産の発展とこれに伴う利害対立の発生、および個々の利害問題に介入する宗教実践の機能的変化について検討する。主な分析対象となるのは、複数の民族集団からなる移民社会における農地相続と利益分配、契約関係の形成であり、親族・ジェンダー・民族の各集団が主要な分析単位となる。ここで明らかにされる事項とは、第一に、南部社会におけるココア生産の発展に伴う相続実践の複雑化(母系か父系か)と利害対立の鋭利化であり、これとの関係で妖術から邪術への宗教実践の変化が詳述される。

第二に、開拓移民社会の地主-小作関係において顕著に示される、異民族間の不均衡な社会経済構造と邪術問題の増加との関連である。具体的には土地をもたないエウエ人たちが、土地所有者たちから邪術の実践者として恐れられていた。以上から本論第一部では、開拓移民社会における社会構成要素間の示差的关系を労働生産関係の側面から明らかにするとともに、地域における宗教実践の力点の変化が、不均衡な社会経済構造の持続や変容と密接に結びついていることを示す。

つづく本論文第二部は、ふたつの問題提起を起点とする。すなわち第一に、南部社会において現在、伝統的な共同体を基盤とする神霊祭祀に比肩する個人主義的な精霊祭祀の発展がいかにして生じたのか。第二に、多民族によって構成された移民社会において、異なる民族の祭祀する宗教実践間にはどのような関係が結ばれているのか。このうち第一点目について本

論文では、南部社会における神霊祭祀と精霊祭祀の特徴との相互補完的關係を検証するとともに、遠隔地からの精霊祭祀の導入と、神霊祭祀との接合の歴史的経緯を明らかにする。第二点目については、移民社会における地主民族と小作民族を主体とする宗教祭祀を比較検討することによって、その差異と共通性を指摘する。

第二部で明らかにされることがらとは、第一に、交易・戦闘・開拓などの諸事業と結びついた南部地域における宗教実践の刷新と、新たな伝統の創出をふくむ宗教祭祀間の接合の歴史である。第二に、移民社会における不均衡な社会経済構造を反映した異民族間の宗教実践の競合あるいは乖離と、流動的な多民族社会において発達しうる、非組織的で機動力に富む、個人主義的な宗教実践である。

以上の検討から本論文では、ガーナ南部における宗教実践とその変化とは、地域社会に遍在する不均衡な社会経済関係と、社会構成要素間の政治的・経済的交渉と密接に関係していることを示す。また、これらの宗教祭祀は伝統的な社会システムを統合する象徴的秩序として機能するのみならず、地理的・歴史的に広域におよぶ遠征や商業活動に伴い、恒常的に変容と刷新を重ねてきたことを明らかにする。

論文審査の結果の要旨

本申請論文は、多民族が共存するガーナ南部の村落調査をもとに、主として邪術信仰と精霊信仰というふたつの宗教活動を歴史的に理解し、そこから現在の歴史人類学に認められる基本的な問題を批判検討し、あらたな方向を示した意欲的な研究である。

本論文は、序論にあたる第1～第3章、本論にあたる第4章～第15章、そして結論の第16章、36表、37図、22写真、14の補遺からなる。核となる本論は、第一部「ココア生産と妖術および邪術」と第二部「宗教実践の共存と競合」からなる。

第一部では、親族内でとくに女性による黒呪術とされる妖術が廃れ、代わって少数民族で、ココアプランテーションの小作民として働くエウエ人による邪術が人々の中心的な関心となった理由を歴史的に考察している。第二部では地域共同体を基盤とする神霊祭祀の代わりにより個人主義的な精霊祭祀が興隆した過程と理由を記述・分析している。

その骨格は要旨を参照するとして、以下に評価すべき点と改良可能な点を述べておきたい。

まず、高く評価すべき点は、論文としての完成度の高さである。文化人類学の論文ではなによりも、一年以上の長期滞在による民族誌資料の収集という方法とそれによる成果が問われなければならない。その点、申請者は全体の8割を占める本論で精密な民族誌資料を体系的に提示し、さらに直接的な主題からははずれるが理解の促進に不可欠と見なされる資料については83ページにわたる補遺に収めている。これらの資料から、申請者が、高い言語能力を駆使してきわめて水準の高い調査を実施したことが明らかである。また、この論文に含まれているさまざまな事実についての知見は、今後のアフリカ研究はいうまでもなく、宗教人類学の分野においても大きな影響を与えるものになることは間違いない。

もちろん、資料の収集だけが評価の対象ではない。つぎに求められるのは、豊富な民族誌資料をもとになにを論じたのか、その目的の妥当性と議論の一貫性が問われなければならない。これについて、申請者は序論の第一章で詳述している。申請者によれば、最近の歴史人類学的研究の主張は以下のようにまとめられる。すなわち先行研究はコロニアルな状況が現代まで続いていると指摘して、それ以前の人類学がコロニアルな状況を見做してと批判する。そして、現代、アフリカで新たに生まれたさまざまな宗教運動を植民地時代に生じた社会変化への抵抗としてとらえる。これは政治的抵抗と区別して「象徴的抵抗」と呼ぶ。しかし、本論文によれば、先行研究には、西欧との接触以前の伝統的調和社会とそれ以後の不安定で抑圧的な社会という非連続的な歴史観が前提となっている。はたしてこのような単純な歴史観が西アフリカで通用するのだろうか。こうした植民地支配以前と支配以後という歴史の二分化こそ問われなければならない。

本論文は、調査地の宗教変化を、植民地支配以後の体制への抵抗としてとらえるには不十分だと指摘する。なぜなら、調査地の変化は植民地以前から続いていたものであり、その当時の変化をも視野に入れた視点から宗教変化をとらえなければならないからだ。こうした先鋭的な問題意識と先行研究批判に見られる議論の一貫性を高く評価したい。

最後に、申請者は宗教変化をマクロな歴史変化や宗教の文脈だけで追うのではなく、ローカルな次元での土地相続をめぐる葛藤や土地所有者と小作農との階級的かつ民族的葛藤を詳細に論じることで、英国の社会人類学の伝統に依拠し、社会的な要因を考慮した考察に成功している。

以上の3点はいずれも人類学を専攻する学究生活に欠かせない資質であり、申請者の将来性を保証するものであると判断した。

最後に問題点をあげておく。ひとつは、植民地以前からの歴史変化を強調するあまり、今度は植民地支配下での変化の影響を十分に考慮できなかった、という問題である。調査地では、西欧の影響を受ける前からすでにさまざまなかたちで外部との交流があり、また資本主義的な経済活動の影響下にあったという主張は正しいとしても、それによって植民地化での西欧の影響が軽減されるものではあるまい。これについては公文書館での調査などを通じてさらなる研究を展開して欲しい。

もうひとつは、既に研究蓄積のある妖術や邪術という概念については、直接本論の議論に関係しない場合でも学説史を念頭にもうすこし丁寧な議論が必要であったかもしれない、という指摘である。

しかし、以上のような問題を含みながらも、先行研究の問題点を鋭利な批判によってえぐりだし、それを乗り越える方途を示そうとした申請者の野心的な企ては十分に成功しており、博士論文としてきわめて高い水準を達成したことを、審査委員全員が一致して判断した。

また、本学位申請論文は、文化人類学研究をめざして創設された文化・地域環境学専攻文化人類学講座にふさわしい内容を備えたものと言える。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成14年5月22日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。